精得館・分析窮理所―長崎大学薬学部の源流について―

本会理事 松田米人

1、分析窮理所

安政4年(1857)第2次海軍伝習所の教官として来日したポンペは、医学伝習所で体系的に医学教育を開始。その後、文久元年(1861)小島養生所の開設に尽力し、日本で最初の西洋式病院を開き、多くの患者の治療と全国から集まった医者を志す生徒に医学教育を行った。

文久2年(1862)ポンペの帰国後、オランダ陸 軍軍医アントニウス・ボードウィンが来日し、ポンペ の後を引き継いだ。小島養生所は、精得館と改称され、 ボードウィンの進言により分析窮理所が開設された。 分析とは現在の化学、窮理とは物理のことである。従 って分析窮理所とは、理化学校という意味である。



小島養生所他写真

①小島養生所②医学所(のちの精得館)③分析窮理所 撮影者不明 慶応元年(1865)以降の撮影

2、薬学教育に貢献した学者たち

分析窮理所は、薬学の研究機関でもあり、長崎大学 薬学部、さらには日本の薬学の源流と考えられる。薬 学教育に貢献した3名の学者を紹介する。

(1) ハインリッヒ・ビュルガー

シーボルトの要請で、出島に薬剤師(博物学の一分野)として来日。鉱物・地質学的な調査等を担当し、 温泉水などの分析などを行い、また江戸参府にも同行 し、本草や鉱物の鑑定を行った。

シーボルト追放後も日本に残り、博物学の標本を本国に送り続けた。天保11年(1840)に帰国。

日本におけるシーボルトの最も重要な協力者だった。

(2) クーンラート・ハラタマ

慶応元年(1865)ボードウィンに理化学専門の教官として招かれ、分析窮理所で行った実験は、当時の最先端であったユトレヒト陸軍軍医学校と同水準の実験であった。当時の日本では穴をあけた茶碗がロートで、徳利を蒸留器の代用としていたが、分析窮理所では最先端の器具や薬品が使われており、西洋流の本格的な実験は長崎でのみ可能だった。

慶応3年(1867)江戸開成所での講義のため江戸に向かったが、幕府の瓦解で講義は出来なかった。 明治2年(1869)大阪舎密局の教頭として赴任、同3年(1870)に帰国。

(3) アントン・ヨハネス・ゲールツ

明治2年(1869)長崎医学校へ着任し、物理・化学・幾何学等の講義を行った。また、当時の日本は医薬品の基準書である日本薬局方が無く、外国とは基準が違うので新しく作成する必要があり、編集委員に任命された。明治10年(1877)オランダ語の草案が完成したが、同16年(1883)横浜にて病没。その後はエイクマン等に引き継がれた。

明治19年(1886)6月25日、『日本薬局方』 の初版が公布された。東洋では初めて、世界では21 番目にあたる国定の薬局方である。現在、令和3年(2021)改訂の『日本薬局方19』に続いている。

3、長崎大学薬学部の歴史

分析窮理所は、明治13年(1890)第五高等学校医学部薬学科となり、佐古校舎を使用、同17年(1894)浦上校舎へ移転、同31年(1901)長崎医学専門学校薬学科、大正12年(1923)に長崎医科大学付属薬学専門部となった。昭和20年(1945)8月9日の原子爆弾で被災、教職員46名が爆死・負傷後死亡した。その後、佐賀多布施校舎、同22年(1947)諫早小野島校舎に移転、同24年(1949)長崎大学薬学部として独立、経済学部別館で授業を行った。昭和26年(1951)長崎市昭和町の西浦上校舎へ移転、同44年(1969)文教町へ移転し、現在に至っている。



長崎大学薬学部同窓会館

長崎大学窓会館は、分析を関する。 分析を関する では、分析を関する では できる (2008)

ノーベル化学 賞を受賞した

同大学卒業の下村脩博士の業績が展示されている。 また、同大学薬草園にはシーボルトの里帰り植物も 栽培されており、自由に見学出来る。

本稿は、令和5年7月定例会発表の要旨である。

参考資料

長崎大学薬学部教授川上茂講演録『分析窮理所の秘密を知ろう』2022年6月20日 長崎大学薬学部五年中記令誌委員会『長崎大学薬学部五

長崎大学薬学部百年史記念誌委員会『長崎大学薬学部百年史』長崎大学薬学部創立百周年記念事業会1990年